

あうる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話22

蝦夷の昆布は北前船で
大坂に運ばれただけではなく
薩摩からの密貿易によって
中国まで運ばれ、
それが明治維新につながった…

なぜ昆布が…

北海道から一番遠い県といえば沖縄。ゴーヤ・チャンプルやソーキなど、珍しい郷土料理がいろいろある。そして昆布で煮た豚骨料理。沖縄は昆布好きで有名である。昆布なくして料理を語れない所、それが沖縄だ。しかし、沖縄では昆布が採れない。国内水揚げの実に九五%以上が北海道なのだ。ではなぜ、北で採れる昆布を、日本の最南端である沖縄県民がたくさん消費するのだろうか？

昆布に関するもう一つの謎として、東西のダシの違いがある。関東のダシの基本はカツオ節である。そして関西では昆布ダシが基本だ。なぜ北海道に近い関東ではなく、関西が昆布ダシなのか？

謎は他にもある。実は昆布消費量が全国一の県は富山県である。昆布を使った名産品も多い。

なぜ富山が、北海道の昆布を自国の名物として売れるのか。なぜ青い海とサンゴ礁の沖縄が、採れるはずもない昆布をたくさん食べているのか。

そこには、江戸時代の流通の秘密が隠されていた。

富山の薬売り

江戸時代、越中富山藩はとても貧しい藩だった。百万石で有名な加賀藩の支藩であったが、石高はわずか十万石に過ぎない。しかし、政治は加賀藩のやり方に倣わなければならず、金欠状態が続いていた。

領地の富山平野を囲むように飛騨の山々が立ち並び、川の流れが急なため、ちよつと

大雨が降ると、米を作っている平野はたちまち水浸しとなる。さらに、春にはフェーン現象で、しばしば大火に見舞われる土地柄だった。

何とかしなければと考えた、富山藩二代藩主前田正甫が目を付けたのが薬だった。正甫は独自の研究による、反魂丹という薬を自藩の商人に製造・販売させ、それを薬



「反魂丹御免札」(富山県立図書館所蔵)
薬売りたちは旅先で御免札(売薬許可状)を得て薬を売り歩いた

売り達が日本中に売り歩くことになった。

人が自由に旅行したり、住まいを変えたりすることが禁じられていた江戸の世で、富山藩の薬売りは、薬という特別なものを売るという理由で、全国に出向くことを許された。マスメディアなどなく、全国の情報など知りようもなかったこの時代、富山の薬売りだけが各地の情報を知り得たのである。

昆布ロード

薬売りから情報を得た富山の商人たちが目を付けたのが、松前藩だった。

松前藩は、江戸中期の宝暦(一七五一〜六四年)頃から徐々に蝦夷の開発を進め、海産物や魚肥などを他の地方へ出荷し始めていた。この輸送と商売を担ったのが、北前船である。市場の動向情報を入手していた富山の船は、どこに何を持っていけば売れるのかを熟知していた。

富山の北前船は、越中の米を積んで蝦夷へと輸送し、その帰りの船で蝦夷の鮭や練

粕や昆布などを富山にもたらした。次にこの船は米を積み込み、下関回りで大坂へ向かう。上方へはこの時に昆布が入ってきた。そして富山への帰路には、上方で綿や塩などの産物を仕入れていた。

こうして、越中〜蝦夷〜上方を結ぶ航海を年二回ほど行う「昆布ロード」が完成した。昆布は江戸へは行かず、富山で大きい消費され、さらに関西にも運ばれ、味の基本になっていったのだ。

昆布が歴史を動かした

この北前船の航路に注目した藩があった。普請による莫大な借金に苦しむ薩摩藩である。薩摩の砂糖を大坂や下関で昆布に換え、琉球(現在の沖縄)を通じて、その昆布を清(現在の中国)に運ぶ密貿易を行い、それによって大儲けしたのだ。このおかげで明治維新までの五十年間に借金を完済し、逆に蓄財するまでに財政を回復させた。

その薩摩の経済戦略の仕掛け人が富山藩だった。富山の薬売りにとって、清から漢方の薬種を安価で入手することが、地場の薬産業を支えるための必要不可欠条件だった。

富山藩は松前の昆布を薩摩藩主に献上し、清との貿易ルートを持っている薩摩藩を動かした。清の高価な薬種を入手するため、雇い入れた船で昆布を蝦夷から薩摩・琉球経由で清へと運び、清で薬の原料を仕入れて富山で薬にし、全国に売り歩いたのだ。

その結果、中継基地となった琉球に大量の昆布が運ばれ、庶民にも安価で手に入るようになり、郷土の食文化に深く入り込んでいった。

さらにそこへ、長州藩もからんでくる。長



「松前屏風」(松前町教育委員会・松前町郷土資料館所蔵)宝暦年間の松前城下。港に北前船の姿が多く見える

州の下関は北前船で運ばれた昆布の中継基地として繁栄し、薩摩藩と長州藩は昆布という共通の産物で儲けた、商売仲間であった。

清との昆布貿易で巨万の富を得た薩摩藩昆布の仲介商社の長州藩、調達資金を援助した富山の薬売り達によって、潤沢な資金が集まったからこそ、明治維新は起きた。

その討幕資金調達のために重要な役割を果たし、歴史を動かしたのが、蝦夷―北海道の昆布だった。

自由な移動が禁じられていた
江戸時代、富山の薬売りだけが
全国に売り歩くことを許され、
各地の情報を知り得た。

あつろの 杜 M・ババッチさん

廃品再生アーティスト

Interview

時代に捨てられたモノを素材に、廃品再生アートを創り出すM・ババッチさん。今回は『もったいない』精神を提唱し、世界中に安らぎと癒しを与えたいと願う、M・ババッチさんのお話です。

名前のいわれ

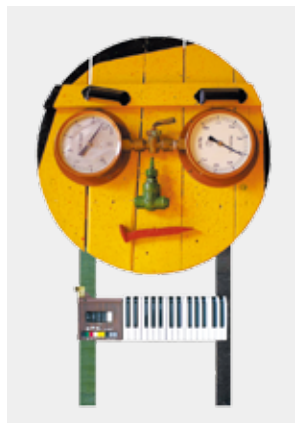
以前は本名でやっていたんですが、廃品アートを始めてから、面白い名前のほうがいいんじゃないかということで、「ババッチイ」とか「汚らしい」というのに本名をひっかけて、M・Babatchiという名前になりました。名前を変えてから運が出てきたというか、注目されるようになりましたね。

Babatchiに「i」を入れないほうがいいよ、という人が多いいのですが、私の作品にはどうしても「i」を入れない。「i」を入れることによって作品に価値が出るのになって。

素材

素材は郊外に行くといっぱい捨ててあります。見たときに「ああ、これ何かに使えそうだな」とって。そんなに大きいものは拾いません。多いのはスコップとフライパンですね。フライパンは拾ってもしようがないくらいあります。安

美流渡を この子たち のユートピアに…



M. ババッチ
M.Babatchi

1945年樺太生まれ、苫小牧市出身。1972年からスクラップアート制作を開始。以来、全国各地での個展の開催や、リサイクルアート展への出品を通じ、ユーモアに溢れた作品で「もったいない」の心、エコロジーの精神を発信する。現在、北海道岩見沢市の美流渡（みると）地区にある「美流渡アートパーク」にアトリエを兼ねた「スクラップアート美術館」を構え、作品を展示中。札幌市在住。

い物だから、ちよつとでも焦げたら捨てますものね。

時代によって捨てられていくものが違います。昔のミシンは素敵だけど、今のミシンは拾いたくない。形が全然違うんです。デザインが過ぎると遊びがないというか、シャープすぎて面白くない。

こだわりの持っているのは、素材を曲げたり穴をあけたり傷つけたりしないことと、できるだけ自分で拾うことですね。

インスピレーション

通算千点以上は創っています。考えたらできるというものではない。考えすぎたらかえってだめかもしれない。とにかく材料を集めて、瞬間的に創るんです。形を創るのにせいぜい二〜三時間。早いときだったら一〇分とか五分で創ります。曲げたり、削ったりしないで、すごく簡単です。ただ、サビを落としたり、色を塗ったりするのが結構大変で、それに時間がかかりますね。

全部、一期一会の縁で私が手にしたものだから、それぞれのいいところを活かそうと思っています。廃品アートは私一人の力でやっているのではありません。みんなの力で営々と受け継がれ、少しずつ改良されたもので成り立っているの、すでに絵になってい

きっかけ

はじめは漫画家になりたいと思っていました。でも、売れないし大変な商売なので、あきらめてデザイナーになったんですが、デザイナーもまた個性が出せない。そこでイラストレーターになっていろいろ絵を描いたりしていた。それでもまだ満足がいかなかった。

一九七二年秋のある日に廃品アートをデザイン誌で見て「あつ、これは面白い。すぐやれるな」と始めたのが病み付きになって、それから四〇年以上過ぎました。

廃品アート

九七年に京都で地球温暖化防止の会議があったとき、その一環として全国から六人のアーティストを選んで、京都市ゴミ減量推進会議第一回「ゴミアート展「もったいない」をやった。それに私も呼ばれたわけですが、これが始まりかもしれないですね。その評判が良かったので、翌年二回目の展覧会にも呼んでもらえた。それからい

ろんな所の展覧会に呼ばれるようになり、仲間も増えて、本州に行く仕事も増えてきた。そのうちに私の廃品アートが教科書に載るようにもなりました。

廃品への愛情

作品はすべて私の子供です。いとおしいものだから、好き嫌いはないですね。これらは一回捨てられたものなんです。散々働いてきて、人のために役に立ったのに、古くなって捨てられた。そんな悲しみをみんな背負っているんですよ。それなのにまた捨てられれば、二度悲しませることになる。

美術館に「MIRUTOPIA」と書いてありますが、それは、美流渡をこの子たちが永遠にのんびり暮らせるユートピアにしてあげたいという、私の究極の願いを表しています。

この廃品アートが私の人生を変えてくれた。だからこの子らのために頑張らなきゃいけないと思っています。

江戸商人の思想

構成作家 小西義孝

江戸時代、江戸っ子は「おはようございます」「こんにちは」などの挨拶の後に、「今日はいいお天気で」「寒くなってきましたね」などというひと言を加えていました。これを「世辞を言う」と言いますが、ここでの「世辞」とは、おべっかを使う意味ではなく、人間関係を円滑にするために必要とされる言葉のことなのです。

人付き合いを大切にする江戸商人達は、子ども達に寺子屋で「世辞の心得」を学ばせていました。当時は九歳までに「さよふでございませう」「お暑うございます」などの大人言葉を身に付けることが必須で、「世辞が言えたら一人前」とされていたのです。

九歳といえはまだ小学生。もし今、そんな子どもに「おはようございます。寒くなってきましたね」なんて言われたら、びっくりしてしまいますよね。

また、江戸の商人には二人はみんなのために、みんなは一人のために」という考え方がありました。ですから、一日の三分の一以上を「世のため人のため」に使っていたそうです。

早起きをして朝食前に近所を見て回ったり、お年寄りに声をかけたりすることを、「朝飯前」と言っていました。それが終わり、朝飯を済ませた後の午前中は、ビッシリ店の仕事に集中します。昼食後は朝回りで気になった人・モノへのボランティア活動にいそしみ、夕方を明日に備えるのリフレッシュ・タイムに充てていました。つまり「明日備（あすび）」↓「あそび」をしていたのです。

そして「はたの人を楽にする」行為が「働く」として。朝飯前・使役・働く。この三つの中で、江戸時代に最も人間として評価されたのは、午後の「はたを楽にする」働きだったそうです。思いやりの心が一番だったんですね。

O W L I N F O R M A T I O N

図書館がもっと身近に、さらに便利に！

札幌市中央図書館

札幌市中央区南22条西13丁目 TEL 011-512-7320
開館時間 9:15~20:00(土日祝は17:00閉館)
休館日 第2・4水曜及び年末年始(12月29日~1月3日)ほか蔵書一斉点検期間

インターネットの普及に合わせ、札幌市中央図書館では資料の公開や貸出予約など、インターネット上の機能強化を進めてきました。この4月、同館は全面改装に踏み切り、4月2日にリニューアルオープンを迎えました。

改装では配置を見直し、貸出可能な本を1階に集約。2階を調べ物中心とし、貸出や資料作成の利便性を図りました。2階には仕切り付きの「キャレル席」を新設。持ち込んだパソコンをコンセントに接続して利用できます。

また、実証実験が続けられていた電子図書館がいよいよスタート。今秋の館外貸出開始へ向け、地元出版社のコンテンツ300点以上を含む、約2,000点の電子書籍が館内の端末で楽しめます。すでに1月中旬から、国立国会図書館所蔵のデジタル化資料約130万点が中央図書館内で閲覧・複写可能になっており、デジタル時代に相応しい知の集積場所の構築に向け、着々と歩を進めています。



「本の森」をイメージした改装となる中央図書館。SAPICAへの貸出券機能の付与など、利便性の向上を目指す

北海道の暮らしに密着した双方向番組

北海道まるごとラジオ

NHKラジオ第1放送
毎週木曜日 17:00~18:00
(大相撲、高校野球期間中などを除く)



「どんど道南」「つながるラジオ@とかち」「道北♥LOVEラジオ」など、北海道内各放送局の持ち回りで個性的な情報を発信してきた「北海道まるごとラジオ」が4月から再出発。「毎週木曜夕方5時のちょっと得するラジオです」を合い言葉に、暮らしに役立つ情報番組に生まれ変わります。

週替わりで登場するコメンテーターは精神科医の香山りかさん、講師の神田山陽さんをはじめ北海道に縁の深い方々ばかり。南極料理人・西村淳さんによるレシピ紹介。札幌市教育文化会館・山田修司さんの文化芸術情報。パントリーコーディネーター森まゆみさんが紹介するパンの楽しみ方など、多彩なラインナップで、リスナーから寄せられた相談やお便りとともに番組を進めます。道内各放送局からの地域密着情報など「LOVE JIMOTO北海道」を掲げるNHK北海道ならではの企画が満載です。



香山りかさん



神田山陽さん



里匠アナウンサー



小林孝司アナウンサー

映像が語る“ふるさと”旭川の記憶

知らなかった、こんな旭川

NHK旭川放送局・編著
定価1,600円+税

昭和8年の開局以来、地域の歩みを見つめてきたNHK旭川放送局。同局では開局80周年を記念し、旭川の歴史と風土を彩るエピソードをまとめた本を出版しました。

本文には市内各施設などが所蔵する貴重な写真のほか、同局保存の撮影フィルム映像から切り出した珍しい画像約390点を掲載。昭和30年代の街並みのパノラマや今昔の比較写真など、眼でも味わえる“ふるさと”旭川の記憶となっています。



中西出版 A5判、160頁
2013年12月刊行

“にゃんこ派”道民必携！

カワイイ!! 道民にゃんこ

北海道新聞社・編
定価1,500円+税

昨春好評を博した公募写真集「カワイイ!! 道民にゃんこ」に続く「にゃんこ編」が、道内愛猫家の期待に応えて、ついに登場しました。

2,000点を超える応募作と道内ネコカフェの人気キャストの写真から、選りすぐりの1,099点を掲載。シーンやエピソードごとに整理された写真の一枚一枚に、撮影者の愛情が込められています。

ページをめくるたびに心が癒やされる、北海道の究極にゃんこ本です。



北海道新聞社 A5変形判、224頁 2014年2月刊行

“美流渡焼”を目指した陶芸家

陶芸家・塚本竜玄作品集

塚本貞男(竜玄)・塚本千代子・著
定価2,000円+税

2013年に逝去した陶芸家・塚本竜玄氏は、中学校で奉職中の1985年に「天目鉢壺」で国際陶芸展最優秀賞を受賞。翌年の教員退職後は岩見沢市栗沢町の「美流渡(みると)アートパーク」に「玄窯」を開き、美流渡焼を目指す作陶生活を続けていました。

追悼の意が込められた本作品集は、躍変天目に魅せられた塚本氏の人となりを伝えるもの。氏の言葉や陶芸作品群のほか、美流渡の野外アート展示場や個展、アトリエの様子などが収められています。



美流渡アートパーク・玄窯記念館
(発売元:中西出版)
A4判横、100頁 2013年12月刊行



1999年創刊の本誌が50号に到達した。休刊の時期があるので少し計算は合わないが、15年が経過した。創刊時の「人との出会いを大切に、地域文化に貢献する」という姿勢で、今後も号を重ねて歩み続ける所存である。「北海道歴史秘話22」を読み、あらためて薩摩(鹿児島)と北海道の深い関係を感じる。昨秋、札幌市と鹿児島市は「観光・文化交流協定」を結んだ。報道記事の中に、薩摩出身の黒田清隆と村橋久成の名があった。村橋はあまり馴染みはないが、日本初の官営麦酒工場の札幌建設等、北海道の産業の礎を築いた人物であり、顕彰する会により知事公館前庭に胸像が建てられ、毎年秋に清掃活動が行われている。これを機に知ってもらえれば幸いである。(Y)

■発行・編集 / 中西出版(株)
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-14
電話011-785-0737 FAX011-781-7516
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp
■発行責任者 / 林下英二
■発行日 / 2014年4月4日

http://nakanishi-shuppan.co.jp

